

俳人協会新潟県支部報

No. 93

令和6年9月15日

第34回「花と緑」

新潟県俳句大会記

寺尾亜真李

海の日の7月15日、新潟県支部は、潮の香も心地よい信濃川河口の「朱鷺メッセ」を会場に、第34回「花と緑新潟県俳句大会」を開催した。

募集句の投句数は1322句。当日の参加者は、昨年を上回る96名。当日句は雑詠2句で、10時30分締め切り、熊谷國男幹事長の発声により開会となった。

山口啓介支部長は開会の挨拶にて、俳句の魅力に触れ、今朝の新潟日報俳句「俳句とふ五感のサブリ新樹晴」のように俳句は人間の五感に、心

にプラスすること、今日は多数出席され心強いと、鼓舞激励された。続いて講師の中西夕紀先生を紹介された。

中西先生は俳人協会評議員にて『都市』主宰。藤田湘子に学ばれ、句集『都市』他4冊を上梓。総合誌『俳句』7月号に掲載され、大変ご活躍されている。

いよいよ中西先生のご講演となる。演題は「俳句で創作するということ」で、俳人大石悦子の句についてであった。以下講演の概略を敬称略で述べさせていただく。

大石悦子は多くの賞を取られた女性俳人。昭和13年生まれ。日々の生活で出会ったこととの生活詠のほか吟行に行かれて詠み、古典からの創作をおこなった。

第1句集『郡萌』の「今日よりは汝が専ら妻垂の花」の専ら妻は波郷の添削。「てふてふや遊びをせむとて吾が生れぬ」は本歌取りの句。

波郷没後石塚友二の「鶴」

に入る。句集『聞香』の「李白酔うて眠れるころの花杏」は、杜甫の漢詩の一章から、古典を基にした創作である。ただ見たものを作るのではなく、本を読んで作るのも俳句の作り方である。

句集『百花』の「よよと泣く人を羨しみ水中花」は水中花の季語が適切で、嘘の恋を表現している。句集『那々』「虹の根を千年抱いて寛となるか」等で「角川俳句賞」。句集『有情』の「死ねばきてわが眼ついでむ虎鶯」等で「俳人協会賞」。句集『百囀』の「負喧してうまうま老いぬわれながら」等で「蛇笏賞」。大石悦子は俳句でエンターテイメントをおこなったと結ばれ、共感を呼んだ。

昼食休憩時間に、中西先生と地元選者11名による特選1句、

佳作20句の選があり13時より俳句大会が始まった。披講は水野宗子、籙本春美の両氏。その後中西先生から募集句と当日句について丁寧な講評をいただいた。続いて当日句の成績発表、募集句・当日句の表彰があった。

閉会の挨拶で、矢澤彦太郎大会実行委員長はこの俳句大会の歴史と年齢に触れ、年代なりの俳句の楽しみ、来年の再会を呼び掛け締めくくった。

◎当日作品の成績

中西夕紀先生選

(特選)

梅雨空を映してピアノ家を去る 樋熊 節子

(佳作)

鳴くと言ふ蚯蚓抓んでみたけれど 菅家恵美子

先生の下宿は二階虫の夜 井口 光雄

朝市や前も後ろも紫蘇の束 渡辺 徳治

移住者の結ひの始めの溝浚へ 番場勢津子

子と帰る潮の匂ひの夏帽子 高埜 健蔵

椀の鱧皮一枚の強さかな 蓮沼 勝代

空蟬よ鳴いてゐるのはお前か



も	阿部佳代子	ゆうそくのあはれあぢはふき	2位・7点(内特選2点及び講師選)	橋爪まゆみ
明け放つ生家の縁の蚊遣香	島野 旬子	。越野 蒼穹選	3位・7点(内特選1点)	山口あつ子
暮れてゆく空に乾杯生ビール	笠原佐千子	小刻みに風を畳めり揚羽蝶	4位・6点(内特選1点及び講師選有)	倉井 幸子
縮みし身向日葵軍に囲まれて	永井 詩	。下條 春秋選	5位・6点(内特選1点)	山口 啓介
疎開せし久の越後や青田波	星野 佐紀	夏帽子どこに置いて母の顔	6位・6点(内講師選有)	井口 光雄
校門に一度おろしぬ樽神輿	倉井 幸子	。土屋 瞳子選	7位・6点(内講師選有)	高埜 健蔵
鮭の部位のひとつひとつや冷し酒	山中あるく	。戸田 一子選	8位・6点(内講師選有)	川口 襄
五頭の嶺に突き当りたる青田風	高野 松風	。島野 旬子選	9位・6点	寺尾亜真李
夏風邪の子が大人びしことを言ふ	成海 静	校門に一度おろしぬ樽神輿	10位・6点	大橋 節子
逢ひたくて黒髪を梳く夏の萩	宮島 敏明	。籙本 春美選	11位・5点	小林 風千
漁火の揺れ一湾の夜光虫	川口 襄	夜濯や介護の一日笑みで閉め	12位・5点	平賀 寛子
梅雨の縁側饒舌な草よ木よ	柗木 幸子	。平賀 寛子選	13位・5点	伊藤二二三
夏来る前歯の白き君が来る	坂井 茂	移住者の結びの始めの溝浚へ	14位・5点(内講師選有)	菅家恵美子
小刻みに風を畳めり揚羽蝶	橋爪まゆみ	。水野 宗子選	15位・5点(内講師選有)	永井 詩
地元選者(特選)		父方は疎遠となりぬ棕櫚の花	16位・5点	土屋 瞳子
。上野 昭一選		。八子 栄子選	17位・5点	籙本 春美
移住者の結びの始めの溝浚へ	番場勢津子	子らの目は母を離れずソーダ	18位・5点	天野三佐子
。織田亮太郎選		水	19位・5点	大井 則夫
		(当日合点成績)	20位・5点	関矢 紀静
		1位・9点(内特選2点及び講師選有)		
		番場勢津子		

令和六年七月十五日
第二十四回
花と緑新潟県
俳句大会募集句

【各選者特選句】	中西 夕紀先生選	先生を待つ教卓のフリージア	若月 柳子
猫の子のこころの隙間へと入りぬ	西村みかん	それだけで足る一日あり新茶汲む	小泉 嘉代
夏海に色を残して大河果つ	石田なるみ	菅野 孝夫先生選	大越 秀子
濡れ紙に鯉を包みて臍の夜	倉井 幸子	朝の雨昼には晴れて桐の花	
井上 弘美先生選	山城 やえ	田植機を洗ひタバコを吸うてをり	金子加津久
覆面をさせて木偶まつ宵祭	平澤ひなこ	早苗饗の上座を空けて田神待つ	倉井 幸子
摘みたる毛虫身振る力かな	榎熊 節子	徘徊の母の後追ふ日永かな	小島 健先生選
雲雀野に莫塵一枚の浄土かな	上田日差し先生選	いい人に囲まれてゐる春愁ひ	澤井 義司
幸せのふりをしてゐる春ショール	川崎 陽子	吾の中の父似母似や茄子の花	小林 純子
良寛の筆辿るかに蝶舞へり	十河公比古	叱られてゐるのは私行々子	
一人静かたくなに唯祈ること	早川智恵子	大水の引きたる路地や牽牛花	高柳 暁
片山由美子先生選	佐藤 さき子	過疎であれ限界であれ春の村	真弥 令子
てのひらに重さを選ぶ梨二つ		遠隔で操られをり水馬	佐藤 春美
		花の雲鳥容れ鳥を飛び立たす	中原 道夫先生選
		ねじ切らぬ分別は有るねじり	伊野 智彦
		花	柗木 幸子
		山口 啓介選	金子 富也
		夜桜や憎くて小さき嘘を言ふ	渡辺 徳治

助手席に退院の妻初つばめ

長野 光雄

父さんをほっとけないよ冷素
麵 春野ぶりん

井口 光雄選

母のかほ見て日帰りの帰省か
高埜 健蔵

新緑や陽明門に雨宿り

佐藤 春美

事故現場紋白蝶が通り過ぐ
服部かねよし

矢澤彦太郎選

夕端居代わりのきかぬひとと
関川 芳弘

居て 寝て癒やす疲れもありぬ春の
成海 静

雨 母の日の豊に拾ふ御飯粒
米山 節子

森山 暁湖選

どこまでも空を汚さず嘸れり
袖山 リエ

深呼吸して新緑の森に入る
本間 政江

いづこから見ても正面金魚玉
小黒 正

赤塚 五行選

仮の世の端に座したる夕端居
渡辺 徳治

母の日の母を畑が呼んでゐる
矢澤彦太郎

自転車に風の翼や夏木立
涼野 海音

井澤 秀峰選

嘸や遺書に延命治療拒否
渡邊 幸子

いたつきの母を介助の衣更
天尾壯一郎

曝書して父の心根覗きけり
永井 詩

石黒 正勝選

一望の里仙界や桃の花
皆川 捷巳

遠き日の白き便箋青簾
宮島 敏明

魂のピアノの音色緑の夜
幸田 和

川崎 陽子選

野遊びに疲れて母の腕の中
伊藤一三三

春畳むごとくタオルをたたみ
をり 浅野 朝女

相伝の田を耕して老いにけり
矢澤彦太郎

熊谷 國男選

ゆつくりと刻の流るる春の雲
井口 光雄

溪流の白き瀬音や若葉風
櫻井 八石

早苗饗の上座を空けて田神待
つ 倉井 幸子

寺尾亜真李選

瑞山の清水いのちをあらひけ
り 山本 武子

糸蜻蛉風の迷子になつてゆく
笠原佐千子

山は人人は山戀ふ万年雪
浅野 朝女

春川 暖慕選

一斉に田が植わり空こそばゆ
き 山口 啓介

筆箱の蛙はあの子転校す
春野ぶりん

今年竹窮屈さうな所より
坂間 壽子

宮 京子選

陽炎を確と抜け行く僧の列
佐藤 龍夫

頑丈を信条の雪囲解く
野澤ミエ子

万緑や今朝初孫の産まれけり
天尾壯一郎

宮沢 房良選

金魚屋の一尾おまけの十一尾
宮島 敏明

春一番肥やし袋の飛んで来し
高埜 健蔵

花鎮めくすりは毒と紙一重
越野 蒼穹

山口あつ子選

事故現場紋白蝶が通り過ぐ
服部かねよし

祭足袋干して昨日と違ふ風
森 貞子

濡れ紙に鯉を包みて朧の夜
倉井 幸子

山之内喜七選

係はれば少し窮屈春ごたつ
高埜 健蔵

小さき手の大きな眠り土筆落
つ 小林 七重

祭足袋干して昨日と違ふ風
森 貞子

若井 新一選

島一步出れば旅人夏帽子
高埜 健蔵

球拾ふ子よりも高き夏の草
佐藤 セキ

故郷の月のはなれぬ車窓かな
関 芙美

渡辺 徳治選

人なのの人に人に馴染めず青林檎
鈴木 靖

幸せのふりをしてゐる春シヨ
川崎 陽子

春霰罪あるごとく打たれけり
遠藤 直子

【高得点句】

1位 11点(内特1)

助手席に退院の妻初つばめ
長野 光雄

2位 7点(内特2)

幸せのふりをしてゐる春シ
ヨール 川崎 陽子

3位 6点(内特2)

祭足袋干して昨日と違ふ風
森 貞子

4位 6点(内特1)

叱られてゐるのは私行々子
高柳 暁

5位 6点(内特1)

寝て癒やす疲れもありぬ春
の雨 成海 静

6位 6点

くつきりと駒の雪形鎌を研
ぐ 菅井 悦子

7位 5点(内特2)

事故現場紋白蝶が通り過ぐ
服部かねよし

8位 5点(内特1)

母のかほ見て日帰りの帰省
たる 森 貞子

かな 高埜 健蔵

9位 5点(内特1)

先生を待つ教卓のフリージ
ア 若月 柳子

10位 5点(内特1)

父さんをほっとけないよ冷
素麵 春野ぶりん

11位 5点(内特1)

朝の雨昼には晴れて桐の花
大越 秀子

12位 5点

子供らの囲む地獄絵夏座敷
永井 詩

13位 5点

海へ出る花アカシアの散る
小径 佐藤 正子

14位 5点

やはらかき息をしてゐる和
紙の雛 袖山 リエ

15位 5点

夏雲や控へ選手の背番号
井口 光雄

16位 5点

曝す書の中にシベリア抑留
記 村山 靖子

17位 5点

妣の服ほどく和鉢春灯
小林 風千

18位 5点

万緑に命一つを洗ひをり
金子加津久

19位 5点

パドックの馬の足並み夏来
たる 森 貞子

20位 5点

旬会報

「青山」新潟加茂旬会

令和6年4月9日(火)
会場・三条市まちやま

- 走り根の上に走り根百千鳥 羽賀 晴子
- 21位 4点(内特1) 早苗饗の上座を空けて田神待つ 倉井 幸子
- 22位 4点(内特1) 島一步出れば旅人夏帽子 高埜 健蔵
- 23位 4点(内特1) 夕端居代わりのきかぬひとと居て 関川 芳弘
- 24位 4点(内特1) 徘徊の母の後追ふ日永かな 高埜 健蔵
- 25位 4点(内特1) 過疎であれ限界であれ春の村 佐藤 春美
- 26位 4点(内特1) いい人に囲まれてゐる春愁 ひ 澤井 義司
- 27位 4点(内特1) 母の日の豊に拾ふ御飯粒 米山 節子
- 28位 4点(内特1) 溪流の白き瀬音や若葉風 櫻井 八石
- 29位 4点 満水のダム湖ふちどる花笈 高埜 健蔵
- 30位 4点 碑の文字の深きに蝸牛 羽生 雅春
- 31位 4点 草摘めど歌はぬ母となりにけり 阿部佳代子

「汀にいがた」旬会

令和6年6月15日(土)
会場・上越福祉交流プラザ

- 山門の朱色のにじむ花の雨 しなだしん
- 佇みて仰ぐ古刹の大櫻 畠野 旬子
- 往く径の芽吹きの小晴れ渡る 広川美津子
- 舟でゆく湯宿の朧灯りかな 森 貞子
- 動かざる浚渫船や春の川 足立 宏子
- 田植済み鳥海山の晴れにけり 五十嵐久子
- 花満開杖を忘れてながめをり 池上 久子
- お食ひ初めの朱の膳占める櫻 柏森 昌
- 鯛 背中より肩に夫の手春満月 田中 幸子
- 花散るや少し色褪せ池の端 八子 栄子

- 蓮の葉の間に空の高くあり たかだ雁木
- 万緑や茶会の席の天守跡 小田ゆかり
- 涼しさや町家の長き通し土間 風間 照子
- 蓮浮葉水面の余白埋め尽くし 小林 淑江
- 夏シャツのホームや赤き弓袋 櫻井 詩子
- 水源の細き棚田や走り梅雨 櫻井 八石
- 寝乱れてシート新たに桜桃忌 滝沢 一成
- 門川の目高の生徒今は何処 澤海由貴子
- 菊芽挿す雨降り止みし朝日影 筑波 文枝
- 忍冬の花や特技は瘦せ我慢 早川智恵子
- 夏燕一振りの小石かな 古川よし秋
- 夏燕氏素性問はず軒を貸す 山岸 幸子

「銀化」とねりこ旬会

令和6年6月23日(日)
会場・万代市民会館

- 廃屋の戸口に迫る鳶青し 山本 信義
- 木喰におもわず微笑かきつばた 吉村 直彦
- 照り翳り著き植田のさざら波 井澤 秀峰

(報・井澤秀峰)

- 鬱積の高に根を張る梅雨茸 中原 道夫
- 白南風や大河のうねり海が呑む 越野 蒼穹
- 言語化に苦しんでゐる蟹の泡 小川 貴史
- ドーナツの穴を残して蟻去りぬ 川本 利範
- 六月の水の回廊受く光 三浦 努
- 砂礫噛む駒草根性深くして 十見 達也
- 夏瘦に幽体離脱して気付く 織田亮太郎
- 武勇伝にも色添えて竹夫人 水木 沙羅
- 沙羅の花よしなしごとを忘じけり 和栗 痴龍
- シャワー浴ぶ言葉も濡らし合ひながら 丘 のぼる

春耕長岡旬会

令和6年5月16日(木)
会場・宮内コミュニティセンター

- 蛇衣を脱ぎ約款の注釈に 山崎 未可
- 世の格差段差に白靴つまづく 西村みかん
- うつせみのこゑなきこゑのたなうらに 白川 博
- ところてん呑むか喰らうか箸一本 上村一九路
- アロハシャツ逆光に透け現れる 金子 富也
- 夏日影揺るるクレインの錘かな 織原 芳晴
- 転寝す目醒めた時は夏の蝶 後藤 博紀
- 朴ひらく一花一花の深空かな 寺尾亜真李

(報・寺尾亜真李)

- 万緑に力を得たり畑仕事 谷内田竹子
- 投球の親の手加減こどもの日 高橋 ヨシ
- ものの芽の道路の割れ目見のがさず 石橋紀美子
- ひらがなは日本の文化こどもの日 伊丹 文男
- 医院での友と再会五月晴 高井 信子

子沢山背丈を競ふこどもの日

菊入 正子

万緑に消えゆく人の手に句帳

平賀 寛子

短夜やひとりの娯楽句を詠みて

西澤 隆博
(報・平賀寛子)

「河」新潟支部六月例会

令和6年6月9日(日)

会場・東新潟コミュニティセンター

人の手を触るるを拒み夏あざみ

矢澤彦太郎

巻尺の急いでもどる梅雨ぐもり

川崎 陽子

風に誘はれ六月の吾と雲と

春川 暖慕

夏瘦は新潟駅の迷路から

宮 京子

杖借りて三百段の風青し

倉井 幸子

瓜揉んで旅の疲れのほぐれけり

小出 利恵

みどり児を見詰むる爺や緑さす

大井 則夫

走り梅雨水輪の中を鯉の行く

斎藤 忠吉

万緑や仮縫ひの袖ふくらみぬ

広瀬喜代子

夏の夜や病室よりの受話器抱く

樋熊 節子

父とゆれ母とゆれたり金魚玉

関矢 紀静

(報・関矢紀静)

「春野」新潟句会

(紙上句会)

いぬふぐり天使のこぼす涙かも

波音や霞隠れに佐渡弥彦

買うてきてもて余したる海鼠

春雪の浄土となりし此岸かな

気掛かりな主治医の一語ク

誘はれて町家の雛の客となり

春来るや梅の干菓子をはほば

れば

芽柳や洪民村は遙かなる

さくら咲くどの道行くも坂な

りし

春の空日がな首振るクレイン

草笛を吹けば山河の遙かなる

水温み出す泡一つまた一つ

井口 光雄

(報・井口光雄)

花筒俳句会

令和6年6月4日(火)

会場・柏崎市民プラザ

薄雲を掃き風を呼び今年竹

水野 宗子

小さき町の洒落たる店先初夏

の風 高島 朝子

子供らの笑顔きらめく庭花火

武本 松久

ごめんねとシャッター下ろし

夏燕 桑原 清風

式典へ新調の靴風光る

坂井 文繪

プランターで足る菜園に茄子

の花 星野 祐子

蛙鳴く慣れて寝入りの心地よ

さ 品田 幹生

元気ですか一行だけの夏見舞

近藤 美好

迷いなく梅雨前線北上中

上野 昭一

(報・上野昭一)

◆訂正とお詫び

前号(92号、5ページ)

句会報の「朱鷺」俳句会の

赤塚五行作「姉待てば鬼に

金棒火吹竹」は「姉持てば

鬼に金棒火吹竹」でした。

深くお詫び申し上げます、訂正

をさせていただきます。

私の吟行地

越後三山

服部かねよし

突堤迄の朝のさんぽ

高 埜 健 蔵

私の住む集落は二十戸ほど

で小佐渡の裾にあり、真野湾

が一望出来て海と山を日々楽

しめる位置にあります。この

歳になると、早朝の散歩が一

日の始まりです。朝のややひ

んやりとした空気のなか家を

出て海へ階なす棚田を右、ひ

だりに見て海岸へ下ります。

畦には外来種の花が所狭しと

咲き、海岸の傾斜地には萱草、

砂浜に浜屋顔、玫瑰の花、あ

さの静けさに微笑んで迎えて

くれているように見え、そし

て湾の沖には漁場があり、五

六そこの漁舟が見え、初夏の

海原が広がります。素人俳人、偽俳

人の私にとっても句材がいっ

ぱい転がっています。でも、

ポンコツの錆付いた頭で、な

かなか出来ません。偶に出来

たと思えばありきたりの句!!

こんな毎朝を過ごしています。

でも私にとっては欠かせない

楽しい防波堤、突堤迄のさん

ぽコース(吟行地)です。

ポンコツの舟を巧みに日焼が

ほ かなかに埒明かぬ拉

致浜防風 突堤にをんな釣

り師ぞ夕焼中

県最南端の魚沼盆地が私の住む所です。四方を大小の山々に囲まれ、中でも東に聳える越後三山(八海山、中ノ岳、越後駒ヶ岳)は四季折々いつ仰ぎ見ても見飽きることのない山々です。

同級生のM君と卒業記念に霊峰八海山へ登山して以来、私とM君の山狂いが始まり県境の山々や近隣の山を踏破して、次に沢登り、冬山、ロッククライミングの真似ごとまで行って山の魔力にどンドンハマり、三十代半ば頃まで山男生活をしていました。その間何度も遭難しかけたり、山中で熊に遭遇したりと・・・このままではいずれ大変な事故に巻き込まれるかも知れないということに興味を山から他のものへ変えました。

今も散歩をしながら思い出のぎっしり詰まっている県境の山々を仰ぎつつ吟行しているととてもなつかしく感じます。

その先は霧の領域女人堂

かねよし

モノを詠め

井口光雄

「俳句・初心の頃」それは50年以上も前に遡る。まず第一に俳句をはじめめる切っ掛けとなったのは、産土神社の夏祭献灯俳句に応募し入選したことによる。

独活取りの重き背中や山は暮れ

光雄

そんな縁から浦佐俳句会に入会することになった。当時は、代表の行方秋峰のもとに森山眺湖・関千年雄等が鎬を削っており、句会は活気に満ちていた。そもそも俳句に関心を持ったのが、小学五年生の教科書に飯田蛇笏の「芋の露連山影を正しうす」に出会ってからである。当時の浦佐八色原を詠んだような句で、とても身近に感じた記憶がある。そんな下地があつてか前述の献灯俳句への応募に繋がったように思う。

そして、第二の契機は、同じ職場（大和町役場）の森山眺湖氏から手解きを受け、作句の骨法を教わったことである。最初は心象的なものが多く、説明をしなれば読み手に理解してもらえない句ばかり作っていた。

やがて昭和48年に「花守」に入会。その後10年間くらいは、鳴かず飛ばずであった。

入会時の花守は、故阿部静雄、渡辺文雄をはじめ、後年「庭」を主宰する山之内喜七や宮沢房良など綺羅星のごとくおられ、正に「雲の上の人たち」が轟いていた。

主催の志城柏は、大学教授で歴史学者であり、俳句について削除等の直接的な指導はなかったが、その豊かな見識から多くのことを学ばせてもらった。また、主宰が「風」の同人でもあったため、結社は自ずと写生句が主体を成していた。

そんな中「目から鱗」の一句に出会う。関千年雄の「夏蝶や朝の廁を子に急かれ」である。「夏蝶」という季語の持つ明るさ、躍動感が「朝の廁を子に急かれ」の健康的な家庭の明るさに繋がっていると感じた。

「花守」入会の10年後、若井新一氏の誘いから鷹羽狩行の「狩」に入会。これが第三の契機。「狩」では都会志向の中の洗練された語感と、いかにして「一句の焦点を出すか」を学んだ。

「狩」に入会后、逆に「花守」を見たとき、初学の頃は気づかなかった「モノを詠む」ことの大切さを感じられた時期でもあった。

「モノを詠め」という俳句の一つの指針。そのことによってあえて心を詠まなくとも読み手には、その心情をも伝わる興行が生ずる。さらにモノを通して自然界の営みとそこに暮らす人たちの在りようも見えてくるような深みを増す句が生れる。初心の頃を振り返ったとき、そんなことが思い出されるのである。

俳句・初心の頃

俳縁

山口あつ子

私の俳句は療養所生活の中から始まった。昭和三十一年、二十一歳の春である。当時職場の先輩から貰った水原秋櫻子の歳時記と、二・三冊の本を持っての入所であったが、其の頃は詩や短歌を作っていた私にとって、俳句は老人の嗜みとしか見えていなかった。但し歳時記は読み物として魅力があり、小型でもあった事から入所の荷に加えたのであった。

療養所の中ではホトトギス系の句会と、馬酔木系の句会が有ったようである。向かいの病棟に居るといふ中年男性に、「私達の句会に入りませんか」と声を掛けられた。秋櫻子の歳時記を持っている事が知られたようである。

その時は丁寧にお断りしたものの、当時「大気・安静・栄養」しか為す術が無かった療養生活の中で、何か一つでもやる事が有っても良いかなと思いつく事となった。

当時は「馬酔木」の林翔先生（後の「沖」副主宰）指導のガリ版刷の「芽」に投句、時折回覧される「野火」にも投句するようになった。

花の雨療養休暇書く

は、「野火」への初投句である。

私に俳句を勧めた人は後年病（脳血管障害）に罹り俳句中断されたが、社会復帰され「沖」に入会、「野火」に戻られる事は無かった。

林翔先生も度々来越され、直接指導頂いた事も今は懐かしい。第一句集『眺ひぐらし』出版の歳も祝の色紙を頂き、悌二郎先生亡き後の事として殊の外嬉しく、大切な宝物となっている。

さて二年半に及ぶ療養生活を終えた私は翌年（昭和三十四年）の春、初めて「野火」の主宰、篠田悌二郎先生にまみえる事となる。

当日は父の十三回忌に当たり、日中の吟行は断念し、夕刻になって田上町の椿寿荘に馳せ参じたのであった。

翌日の第三句会の後、次の吟行地へ向かわれる一行と、私だけ駅頭でお別れしたが、その折悌二郎先生に言われた「しっかりやって下さい」のソフトな声が、今も耳に残っている。

阿賀野川あを波立てり初さくら

はその折の師の句であり、自注現代俳句シリーズ『篠田悌二郎集』にも載っている。

さて、田上町での句会から日を経ずして、悌二郎先生から思いもよらぬ手紙を頂く事となる。「あなたを一人前の女流にしてみせます」とあり、以後一年有余添削を仰ぐ事となった。

当時、新聞投句は邪道だ等と言われ、俳壇との交流も拒絶するほど孤高を貫いた師がしきりと懐かしく思われる此の頃である。

荒地野菊

相澤秋生(艸)

山ざくら一村此處に在りし跡
春夕焼地球に戦ある不思議
夏つばき儂きものの美しき
ひととせのめぐりは迅し実梅挽ぐ
水切りを競ひし友よ遠き夏
大根を播くにひと雨欲しといふ
伊那谷の荒地野菊や井月よ

望郷歌

青柳明子(無所属)

若き日に越えし峠や朧月
思ひ出も荷物のひとつ花の雨
ゆつくりと傷治りゆく木の芽風
さざ波と燕の腹のひかり合ふ
金色の烏賊は豊漁望郷歌
露草の群れて朝日の女坂
寒三日月佳き思ひ出のかさばらず

オクターブ

足立宏子(青山)

冬怒涛遠流の島は闇の果
欠航の越佐海峡虎落笛
静けさや曇り硝子に雪の花
オクターブ高く鳴く鳥春近し
春日影笑む双体の道祖神
畦萌や一雨ごとに彩を増し
磯遊びまたも崩るる砂の城

孫娘結婚

伊佐郁子(春野)

婚礼の館を囲む青葉かな
婚礼の始め讚美歌バラ香る
花嫁の衣裳は清楚夏燕
猛暑日や心に沁みるコンサート
江畔の空へ彩なす蚩かな
文字摺草濡れ色著き句碑の文字
栗の花北陸道の彼方此方に

私の近詠



『私の近詠』は原則として、
アイウエオ順に掲載。(編集部)

雛まつり

青砥真貴子(葉)

さざなみに白鳥の引く気配かな
道端に山頭火句碑木の芽雨
蹊に漣あかり草萌ゆる
紅椿苑にひとりの刻長し
遅咲きの梅満開に地鎮祭
束の間の雨に日の香や雛まつり
寺町に花と香買ふ雛まつり

大花野

秋山保子(無所属)

用水路跳びてここより大花野
霧が霧押して川筋あらはるる
うす雲のベールも佳けれ今日の月
一睡のあとの静けさなほ夜長
足らざるを少し足す日の茸汁
昨夜の雨しつとり秋を置いてゆく
降りしきる雨や織女の涙とも

青田波

荒井英子(泉・花守)

山越えてくる海の風青田波
木の根方跨ぎつ巡る泉かな
蛇神へ昇る百段風涼し
榊林のそよぎに揺るる泉かな
駅涼し日本語英語中国語
蜥蜴逃ぐ地主の吾と目が合ひて
海開き佐渡より高く神輿昇く

心経

大島詠志(庭)

心経を上げて新茶を濃く淹れる
着慣れたる農衣の重さ薄暑光
撮り鉄へ注意看板青田風
聖五月母の遺せしくせ箒
履き慣れし靴とゆやけの田を上る
受診日の脱がせて着せて更衣
開けたての古き網戸の機嫌買ひ

事務局だより

幹事長 熊谷國男

◇「第34回花と緑新潟県俳句大会」が7月15日(月・祝日)開催されました。当日の参加者は96名で定員百名の会場がほぼ満席となりました。

◇大会当日には、講師の中西先生に同行された結社「都市」の会員4名の方が一般参加されました。また、長岡市出身で県外在住の方は美家の墓参りを兼ねて参加されていました。この「新潟県俳句大会」は毎年、募集句に投句される人、大会会場に直接参加される人など県内外の多くの俳句愛好者が関わっています。この俳句大会が取り持つ俳句の縁、各人それぞれの「俳縁」を今後とも大切にしていきたいものです。

◇「新潟県俳句大会」も回を重ねて34回目の開催でした。その運営に当たり少しマンネリに陥っていないだろうか。例えば、事前の募集句は季語を「春と夏」に限定していません。今後も現状のままでよろしいかどうか、など現在の大会運営について検討する必要があります。

◇中西先生は講演の中で、大

石悦子は相聞歌が好きで古典特に万葉集から句材を求め一方、杜甫や季白の漢詩にも興味をもっていったという講話と関連して「皆さんが俳句に行き詰まったら、本を読んで句を作ることもひとつの方法です。」と言っておられます。句づくりにはたいへん参考になると思います。

◇なお、大石悦子は師石田波郷(昭和44年没)とは生涯一度も対面の機会がなかったとのこと。

◇支部会員の消息(敬称略)

- 新会員紹介
- 井上 祥子(佐渡市) 朱鷺
 - 西崖 コウ(新潟市) 朱鷺
 - 村山 映子(新潟市) 香雨
- (退会)
- 令和6年3月16日〜7月31日
 - 佐藤 文子(新潟市) 蘭
 - 中村 昭義(新潟市) 百島
 - 平岩 静(佐渡市) 春耕
 - 星野ヒロ子(小千谷市) 風港
 - 増田 芳男(新潟市) 貂

第7回新潟県支部俳句大賞のご案内

実施要領及び応募書を県支部報93号に同封いたしました。

第14回新潟県吟行会のご案内

実施要領についても本号に同封いたしました。

◆お願い

支部報掲載の希望などありましたら、是非編集部ご連絡を頂くと有難いです。随時お待ちしております。特に会員の『句集』についての紹介、鑑賞などありましたら歓迎です。ただ会報発刊の時期が年二回の、4月と9月に予定されていますので、掲載時期は編集部にお任せください。会員の高齢化に伴い、支部会報の原稿依頼が困難になっています。会員の皆様方のご協力をお願い致します。

(編集後記)

夏の風物詩と言えば各地の花火大会や夏祭、高校球児の甲子園球場での活躍などですが、今年はさらに佐渡島金山の世界文化遺産登録やパリオリンピックの開催、また二十年ぶりのお札の改刷や株価の記録的乱高下など話題が盛りだくさんでした。

東京オリンピックはコロナ禍のため無観客で行われましたが、パリオリンピックでは多くの観客の声援を受けた選手達の華々しい活躍により、テレビの前で応援している私達もたくさんの大きな感動を貰いました。若者の活躍は勿論ですが、ベルサイユ宮殿を会場に行われた総合馬術団体では日本が銅メダルを獲得しました。日本が馬術でメダルを獲得したのは九十二年ぶりとのこと。人馬一体の美しい術を見せてくれました。チーム名を「初老ジャパン」としたのはあまり目立たない競技を印象づけたからだそうです。チームの中で最年長者は四十八歳。夢や希望、目標を持ち続けることの素晴らしさを改めて感じました。

(籟本春美)

俳句の、「てにをは」について一考。「夏草や」兵どもが夢の跡」芭蕉これは芭蕉が奥州平泉に立ち寄ったときに詠んだ句です。「や」と「が」の関係が抜群。今、夏草が深く生い茂るここ高館(たかだち)、むかし、武士たちがいさまくも、はかない栄光を夢見た戦場のあとです。平泉といえば義経が臣下と共に立てこもって討伐軍と戦った地。というはそのことを指しています。かつてつわものどもが、功名の野望をいだいて奮戦し、儂く散っていった居城も今は夏草が生い茂るばかり、というような情景を謳っています。例年、生い茂っては枯れをくり返す夏草は、それ自身が人の夢のはかなさを象徴しているとも言われます。「夏草の」兵どもの「夢の跡」では、もちろん、散文に説明になります。原句は「や」の切れと「が」の一字が絶妙。「や」と「の」の組み合わせでも迫力がない。芭蕉は「が」の取り合わせで頂上を極めて、佳句中の佳句に完成させたのです。俳句の「散文」「韻文」の世界は永遠の課題です。

(渡辺徳治)